

Title	表現・構造から考える「趣味の遺伝」： 戦争への想像力と慰問者・慰霊者としての語り手「余」
Sub Title	
Author	五島, 慶一 (Goto, Keiichi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.48 (2008. 12) ,p.63- 75
JaLC DOI	10.14991/002.20081200-0063
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20081200-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

表現・構造から考える「趣味の遺伝」

——戦争への想像力と慰問者・慰霊者としての語り手「余」——

五島 慶一

明治三十八年末に執筆され、翌年一月の『帝国文学』に掲載された「趣味の遺伝」には、その素材の一部として直前にあった日露戦争が描かれている。描かれている、という点に疑問の余地はないので、問題はそれがどのように描き出されているかということになる。

どのように、といつても、作者レヴェルで戦闘状況把握の素材となったもの（先行テキスト）や（それらに関連して）場面描出の手法に関しては既にある程度の数の言及が存在する。それらを踏まえつつ、ここではもう少しテキスト内在的な側面からその問題を考えたい。即ちそれは、作中語り手である「余」がどのような手つきで戦争を語っているかという、いわば態度としての手法の問題であり、更に問題を特化して限定すれば、日露戦争からその戦後という状況の中で、それによって死んだ「浩さん」に対して作中現在の「余」がいかに接近し、その過去（思い出）をどのように取り扱って（描出して）いるかという点が以下の考察の中心になってくるだろう。従来論にあつて、テキスト後半、且つ「此一篇の主意」であると「余」の言う「趣味の遺伝」——「浩さん」と「寂光院の女」との関係——

についての叙述における「余」の態度は縷々論じられているものの、〈戦死した友人に対する（を語る）「余」の態度〉という点からの考察は余り行われてきてはいないからだ。

一 「余」から見た〈戦争〉——大衆的視線

「陽気の所為で神も氣違になる。」に続く冒頭部の一段は、この作品を論じる上でほぼ必ずと言っていいほど言及される有名な箇所である。それほど確かに、この部分の叙述は異様に人への迫る力を強く持っている。その要因は恐らく、徹底的に人間が疎外された暴力性の表象にあるのではないかと思う。例えば、「四つ足の銃丸を一度に打ち出した様に飛んで来」る「癡狗の群」という表現がある。「様に」と直喩になっているが、これに相当する実景では実際に銃丸は打ち出されているはずだ。しかしこの表現の結果、「癡狗（犬）」と銃丸は直接的に結びつき、撃ち手である兵士の姿は何処にも現れてこない。兵士Ⅱ「人」は、その「犬」どもに食われる対象でしかないのだ。ここに見られるのは、同じく人と人とは殺し合うにしても、一人の人間が相手に向けて単発的に銃丸を発射するという、嘗ての

一対一的な〈点〉での戦闘ではもはやなく、機関銃によって同時に多数の弾をあるいは無差別的に発射する〈線〉での、乃至砲弾による〈面〉での攻撃へと変化した近代後期以降の戦闘の姿そのものののである。ここから、「犬」が後の戦車や戦闘・爆撃機に繋がるような大量殺戮兵器のメタファーであることは見易い。「狂ふ神の作つた犬には狂つた道具が具はつて居る。今日の振舞を予期して工夫して呉れた歯ぢや。」とあるのは、日清戦争後、対露戦争に向けての軍備拡張が暗示されているのだろう。

「日人」「露人」という二つの陣営が、狗の群を使嚇して殺し合い、人の屍を食わせるというこの場面は従つて、戦場が「人間による極限的な肉体冒瀆の現場である」ことを示すに留まらず、更に戦争の現場から（あるいはそこで）の、人間そのものの徹底的な疎外を示していることは見逃せない。尤も、それは歴史（日本史・世界史）的に見れば一種の必然であり、決して「神」の「陽気の所為で」の気まぐれ（＝一回的・偶発的事態）などではない。そこを敢てこのように言つたところに、漱石の、あるいは（以下「浩さん」を巡る一連の出来事を）記述・再話する時点での「余」の、そこまで進んでしまつた近代の戦争に対する皮肉を読み取る向きもあるかも知れないが、それは後述するように、決して批判と呼べるほど強いものではなく、またそのように高められ純化された性質のものではない。あるいはそもそも「陽気の所為で」の「神」の仕業という前提の仕方それ自体が、もはや徹底的に人間が疎外されてしまつた近代の戦争の本質というものに味い「余」のあり方を浮き彫り

にしていると言つた方が蓋然性があるだろう。後の、やはり想像による戦闘場面の中で、「余」は自分にとつての「偉大な男」（個人的英雄）である「浩さん」を戦場に探すものの、結局それが群像としての兵の一人に過ぎないことを改めて発見する結果となるのだが、そこからは同時代の世事ばかりではなく歴史的現実にも疎い、（その意味では致命的欠陥を抱えた）「学者」としての「余」の姿が浮かび上がってくるだろう。

「怖い事だと例の通り空想に耽りながらいつしか新橋へ来た。」——先の引用に続くこの一文から、そうした「余」の事態に対する態度はより決定的なものとなる。すなわち、冒頭の叙述が先述の通り強い衝迫力を持つているにも関わらず、この一篇が「小説ではない」と言い続ける「余」はその重みを深く考へることをせず、いつもの空想の一つ（例の通り）から、「余」は常日頃から空想がちな人物である——そのように造型され、乃至本人がそう意識している——ことがわかる）として「怖い事だ」という至極あつさりした感想の中に回収していつてしまっているのである。すぐ後に駅で凱旋を迎える集団に行き当たつたとき、自らの空想を振り返つて「急に気の毒になつて来た」辺りからも、「余」の歴史の流れへの冥妄ぶりは確認できよう。

もう一点、「余」に関してここから指摘できるのは、彼が周囲の状況に影響されやすい人物であるということだ。「余」はもともと約束して人と待ち合わせに来たというのだが、相手を待ちあぐねるうちに「少々退屈になつたから、少し外へ出て見様か」①と待合室を出かけたところ、「もう十五分すれば凱

旋の將士が見られる」というので「丁度幸だ見て行かう」と見を定めた」(②)という。外では大勢の群集が行列を作っている中に「態々見物に來た西洋人も交つて居る」のを発見した「余」は、「西洋人ですらくる位なら帝国臣民たる吾輩は無論歡迎しなくてはならん、万歳の一つ位は義務にも申して行かうと漸くの事で行列の中へ割り込んだ」(③)。

①から③へと、徐々に「余」の行為の積極性が加速してきているのがわかるだろう。しかしそれは決して自ら主体的に何かを行った経過ではなくて、周囲の状況に自らを(前意識的に)合わせていった結果であるに過ぎない、という点の方が寧ろ重要なのだ。遂には、これまで一度も唱え(られ)たことのない「万歳」を「今日を出してやらう」と「決心」までしている。文字通り歡迎の大衆の興奮の渦、その雰囲気「余」は完全に呑まれ、そこに取り込まれているのである。

そんな「余」の前を凱旋の先頭を切つて一人の將軍が通つた途端、彼は「万歳」を発することができなくなる、「と共に胸の中に名状しがたい波動が込み上げて来て、両眼から二雫ばかり涙が落ちた。」という。その要因を事後的に分析する「余」は、まずそれを凱旋將軍の「老い」に帰する。特に彼の「日に焦けた顔と霜に染つた髯」、そして「苦勞の為めか」(この原因も「余」による想像である)「頗る瘦せて居た」ことに、「戦争の結果——慥かに結果の一片、然も活動する結果の一片」を見たというのだ。「戦は人を殺すか左なくば人を老いしむるものである」と「余」は言う。だが、たとえ老いたとしても(歡迎を受けて)還ると、死んで帰らぬのではその意味の重みは

大きく異なるはずだが、ここに於いて「余」はこの二項を同列に並べて考えており、死者に対する想像力は少くともこの時点では全くと言っていいほど働いていない。因みに、後の部分で「浩さん」のことに言及が至ったとき、「白髪にならうと日に焼け様と」はたまたいかに重い後遺症を負つても、生きて「帰りさへすれば構はん」と言つて、そこでは確かにこの部分を踏まえて生と死の間に大きな線を引いているのだが、しかし今度はその問題をそれ以上展開してゆかない「余」の姿(態度)が確認される。

結論を先取りすれば、「余」の戦争に対する想像力は大きな欠陥を抱えた、偏頗なものであると言わざるを得ない。想像力の限界、ということでは「余」自身が次のように述べている。

余の如きは黄卷青帙の間に起臥して書齋以外に如何なる出来事が起るか知らんでも済む天下の逸民である。平生戦争の事は新聞で読まんでもない、又其状況は詩的に想像せんでもない。然し想像はどこ迄も想像で新聞は横から見ても縦から見ても紙片に過ぎぬ。だからいくら戦争が続いても戦争らしい感じがしない。

それに対し、今眼前に見ている將軍の姿こそが(対比的に)確かに戦争の結果の一片である、ということを思い、更にその顔から読み取つたものに「誘はれて満洲の大野を蔽ふ大戦争の光景があり／＼と脳裏に描出せられた。」と「余」は言うのだが、実はそこまで含めて彼の想像は直観的で、客観的な裏づけを欠いた想像でしかない、という皮肉にも決定的な事実には全く気づいていない。そこでの「將軍の髯」は「余」の中で戦争

の換喩としての機能を果たしている。⁽⁹⁾一方、先に引いた本作冒頭部、「余」の空想に見られたのは、戦争の直喩的暗喩（「徹底的に人間が疎外された陰惨なイメージ」であつたわけだが、それはここでの「將軍の髯」（の強度・それが喚起するもの）による上書きによつて相対化されてしまつてゐる。

更に、「余」は自らの落涙の要因として、彼の周囲で起こる大衆の「万歳」の声から、しかもそれと対比的に戦場で極限状態に置かれた兵士（たち）の意味を成さない・持たない声——〈誠〉そのものである呐喊を聯想し、それが眼前の一將軍に結び付いたというのを挙げてゐるが、戦争の現実的に大多數の死者をその中から出した末端の兵卒の如くには、この將軍自身はそのような「死ぬか生きるか娑婆か地獄かと云ふ際どい針線の上」には置かれていなかったということは「余」に全く意識されてゐない。因みに、後に芥川龍之介が小説「將軍」（『改造』大正十一年一月）第一節「白襪隊」にて同じ日露戦争、特に松樹山攻略戦に焦点を当ててゐるが、そこでは同じ戦争の、同じ作戦に従事するのでも、指揮官の中でも最上位に位置する將軍と、最下層——最前線に送られる兵士とは全く異なる位相に位置していることを端無くも暴き出してゐる。⁽¹⁰⁾翻つて「趣味の遺伝」を見た場合、そうした視線は「余」の認識において全く欠落していることは明らかであろう。「数十人、数百人、数千数万人の誠」——その数から、それは下層兵卒のそれであるはずで、その窮極の叫びを凱旋——つまり生還した一將軍の髯に見てしまふところに、「余」の想像力の限界乃至大きな問題点があると言えよう。

「経済主義」「功利主義」「一心不乱の至境に達し」「崇高の感」は始めて無上絶大の玄境に入る」などと、禪語・漢語を多用したここでの言説は「余」が読書人であることを示す一方で、その発想は書齋人——將軍同様「死ぬか生きるか娑婆か地獄かと云ふ際どい針線の上」すなわち戦闘の現場に決して自らの身を置いて考へてはいない者——のそれである。あるいはこの、「天下の逸民」を自認する「余」の想像の仕方、即ち「戦争はまのあたりに見えぬ」だけに、却つて事後に於いてたまたま目にした、特にその中でもとりわけ目立つものに対して「戦争の結果」を感じてしまふというのが、内地国民——大衆の一般的なあり方なのかも知れない。戦争の換喩を「將軍の顔」に感じた「余」が、それをもう一度見たいと思うのも、やはり決して直接に戦場に立つことはいない大衆の視線と同質である。尚、そこで比較に供されてゐるのが戦場に出なかつた（と思しい）出迎への士官であり、最前線に立つた兵士ではないという点にも注目したい。そのとき「余」と「左右前後の人々」の視線は一体となつて、彼等はそこに「帝国の運命を決する活動力の断片」を見ようとするのである。尤も、そこでその対象を見たいという欲望自体は、続いて「去年の春麻布のさる町」での「余」の体験として挿話的に語られる、他人の邸の塀の内で行われてゐるかを知らたいという野次馬根性と質的に何も変わらない。

二 戦場に向けられる「余」の視線

大衆と一体化した「余」の視線は、次に將軍と共に汽車を降

りた一般兵士たちに向けられる。彼らを目して「戦争の片破れ」「大和魂を鑄固めた製作品」と言い、「日本の精神を代表するのみならず、広く人類一般の精神を代表して居る」とまで持ち上げるこのあたりの叙述は、前年来帰り立てられ盛り上がったいたナショナリズムの文脈に、「余」の言う「学者」的な扮飾を施したものに他ならない。

そんな中、凱旋兵士の群の中に戦死した親友「浩さん」とよく似た一人の軍曹を発見した「余」は、先述の集合的な観点を離れ、再び個人的な視点での叙述を開始する。尚その折に「此軍曹が浩さんの代りに旅順で戦死して、浩さんが此軍曹の代りに無事で還つて来たら無結構であらう。御母さんも定めし喜ばれるであらう」などということを中心考え、それを「人情」と「余」は云うが、ここに見られるのは明らかに戦争の当時者（帰還者・戦死者・繫累・遺族）に対する眼差しではなくして、単に（不在の）知人を求めるそれである。例えるなら、駅で人を待っている（余）の言い分に拠れば彼の目的はそもそもそれであつた時に、列車から降りてきた者がよく似た他人ではなくて、待ち人その人であつたらよかったのに、というのと何ら変わらない。戦死という取り返しのつかない事態をそのように軽く捉えてしまう「余」の発想のあり方は、続く第二節で描かれる「浩さん」戦死の場面にも影響を及ぼしている。

その冒頭に、「浩さん！ 浩さんは去年の十一月旅順で戦死した。二十六日は風の強く吹く日であつたさうだ。」とあり、以下の記述が伝聞であるということを明示しつつ、一方で「こちらから眺めると只一筋の黒い河が山を裂いて流れる様に見え

る。」という表現の如く、その光景を今眼前に見ているかのやうに「余」の想像力は働く。そこで描かれているのは、「敵の弾丸は容赦なく落ちかゝつて」いる中に決死の突撃をする兵たちの、その一人である「浩さん」の姿なのだが、それを「余」は「火桶を中に話をする」という完全な平時日常のレヴェルから導き出している。直接眼にしているかの如く装いながら、しかし実際には戦場を知らず、又仮にその場にいたと指定したところで、自らの身体・生命を危機に晒すような状況とは無縁の「余」の視線にとつて、戦場の時間は自らの過ごしてきた／現に過ごしている平時日常の時間と等価で往来自在なものとして把握されていることが分かる。「余」にとつて「偉大な男」である彼が戦場に「蠢めいて居る」兵の群の中に埋もれていることを嘆き、「嗚呼浩さん！ 一体どこで何をして居るのだ！ 早く平生の浩さんになつて一番露助を驚かしたらよからう。」などと言つたりするわけであるが、それは宛も戦地からは遠く離れた国内でニュース映画などを観る大衆の視線と同質である。

以下、「浩さん」に対する「余」の期待の地平は保たれたまま、つまりその行為が何を意味しているかとは全く無関係に、「とにかく此混乱のうちに少しなりとも人の注意を惹くに足る働をするものを浩さんになりたい。したい段ではない。必ず浩さんに極つて居る。」という視線に基づく戦況描写が続く。彼が敵塁奪取作戦に従事し、それにより塁下に設けられた塹壕の中で戦死したこともその展開の中で語られるが、その叙述の途中で、「余」の眼はその（現場）を離れ、語り（記述）の今日の

視点へと回帰する。即ち、「浩さんがしきりに旗を振つた所はよかつたが、壕の底では、ほかの兵士と同じ様に冷たくなつて死んで居たさうだ。」と、再び伝聞を示す形式で締め括られるのである。そこで初めてその壕が完全に敵の照準下にあつたこと、従つて、「浩さん」ら兵士に課せられた任務とは「死ぬために飛び込」むことであつたことが明らかにされる。それに続く記述「ステツセルは降つた。講和は成立した。將軍は凱旋した。兵隊も歓迎された。然し浩さんはまだ坑から上つて来ない。」以下で、勝利・講和・凱旋という全体的な大きな流れに比して「浩さん」たち戦死者の取り返しのかなさについては繰り返し述べるものの、「余」の発想はその根源の要因にまで溯つていくことをしない。ただ「浩さんは何故壕から上がつて来んのだらうと思」うばかりで、やがては「是でも上がつて来ないなら御母さんの方からあとを追ひかけて坑の中へ飛び込むより仕方がない。」という、諸諍的批判にしても余りに乱暴な纏めによつてその部分の回想を打ち切っている。

作品本文の記述を振り返れば、先に「浩さん」が「志願兵から出身した歩兵中尉である」ことを語る「余」は、しかし彼が今回の戦争にはどのような経緯で関わることになつたかという点を明らかにせず、またそもそも一人子の彼がなぜ母親一人を残して（この点、推測となるが、「浩さん」に以前は兄弟がいた、というような記述は作中に全く見当たらないこと、又、彼の父・貢五郎に関しては、彼と「終夜激論をした位な間柄」の人物が「せがれ（引用注——「浩さん」のこと）は五六歳のときに見たがりで——実は貢五郎が早く死んだものだから、（略）

其後は頃と逢ふた事がありません」と言っていることから、遅くとも「浩さん」成人前に死去していると考えてよいだろう）軍隊に志願するに至つたかという（13）ことにまで想像を及ぼすことはない。あるいはそれは「帝国臣民たる」の「義務」として、文字通り語るに落ちることだというのだろうか。

概して、「余」は戦争の結果、特にその一部（將軍の凱旋や「浩さん」の戦死など）には思いを致し、時にそこに感情的に浸りがちな一方で、そこから根源に溯る思考を持たない。それはこのテクストで終始活発に働いている「余」の想像力が、しかしそのあり方においてはあくまで傍觀者のそれではないということを端的に示しているのだろう。

三 慰霊・慰問者としての「余」

そうした「余」のどこか微温的な態度は「浩さん」に対する慰霊・御母さん」に対する慰問者としてのそれにも引き継がれてゆく。

新橋駅頭で偶然見かけた軍曹の姿から「浩さん」のことを想起こした「余」はその翌日、弔いのためと菩提寺参りに出る。だが恐らく「余」の視線に従つたと見られるその部分の記述は散漫で、宛も散策に出たかの如き調子となっている。それは例えば次のような態度となつて表れる。

しばらく化銀杏の下に立つて、上を見たり下を見たり行んで居たが、漸くの事幹のもとを離れて愈墓地の中へ這入り込んだ。（略）石塔も沢山ある、戒名も飽きる程彫り付いてあるが、申し合はせた様に古いの許りである。近頃

なつて人間が死なゝくなつた訳でもあるまい、矢張り従前の如く相應の亡者は、年々御客様となつて、あの剥げかゝつた額の下を潜るに違ない。

傍線部、「従前の如く」とは、直前の日露戦争で八万四千人超の死者が出たことを度外視した表現である。これはわざとそれを無視したというよりも、ここでの「余」にそれが自ずと意識されていないことを意味しているのだろう。そのこととの關聯で、「浩さん」を「先祖代々の墓の中に」「祭り込まれた一人」と語るここでの「余」の視線の中で、彼の存在はもはや風景の一部と化しつゝある。そうした「余」の認識の方向性をより決定的なものとしたのが、「余」より一足早く「浩さん」の墓に詣つていた一人の若く美しい女の姿であつた。彼女に眼を奪われた「余は浩さんの事も忘れ、墓詣りに来た事も忘れ、極りが悪ると云ふ事さへ忘れて白い顔と白いハンケチ許り眺めて居た」と明言しているが、戦死した親友の墓の前にしての「余」の想像力は、このときは勿論、そこに至る道中から既に「浩さん」とは相対していなかったことを付言しておこう。

墓詣りとは譬喩的に云つて、そこに眠る（と仮想される）故人と對話すること——自己の記憶の中の故人と各人が向きあふことである。恐らく「余」に遭う前、「人が後ろに居やうとは夢にも知ら」ず「しやがんだ儘熱心に河上家代々の墓を礼拝して居」た女はそれを行つていたのだらう。ところがここで、又これ以降の「余」はひたすらに女のことを考え、一方で（まず初めにそれを見たときを中心に）女から受けた印象を懸命に読者に向けて語っている。そこでの叙述に於いて「浩さん」は置

き去られたまま、ただ「学者」としての「余」に意識されるのはテキストの向こう側に想定されている、未見の「読者」の存在とその思惑のみである。一部に、「時刻は一時か一時半頃である。丁度去年の冬浩さんが大風の中を旗を持つて散兵壕から飛び出した時である。」と彼への言及があるものの、ここでのそれは単に女の様子を語る（限定的にはそのときの時刻を示す）ための具に過ぎないのであり、そのような形でしか「余」の言説に「浩さん」は必要とされていないことになる。⁽¹⁵⁾

次いで「余」が気にかけるのが女の正体である。墓詣りもそこそこ（テキストから読み取れる限り、彼が墓前で考えていたのは女のことばかりである）「余」はその跡を追うが、結局見失つてしまう。女の正体に関する手がかりを求め、「浩さん」の「御母さん」のもとへと出向いてゆく、というのが第三節へ向けての本文の流れであるが、実はテキスト中で「御母さん」訪問はここで初めて提示された事柄ではない。

これより先、「浩さん」戦死の記述——「余」の回想に続き、「幸ひ今日は閑だから浩さんのうちへ行つて、久し振りに御母さんを慰めてやらう？」という一文があつたのである。そのときは「行く度に泣かれるので困る」という理由により取り止められ、その代替としての行為が墓参となつたのであるが、問題の文の末尾に疑問符がついていることに注目すべきだらう。現にこの後すぐにはそれを行つていないことから、（形式上）これは単なる「余」の思いつきとしては書かれていないことが分かる。宛ら他者から提示された案のようであるが、「今日は閑だ」という内的な事情を知っているのは自分自身以外にはあ

りえないので、これは「余」の内的な問答であると解することができる。尚、そこで彼は「泣かれるのも少しなら厭とは云はない。元々木や石で出来上つたと云ふ訳ではないから人の不幸に対して一滴の同情位は優に表し得る男である」と自負するが、「一滴の同情」という表現は、「御母さん」に寄せる「余」の感情の稀薄さと、同情というものが本質的に孕む、相手に対して高所に立った上で生じる無責任さをよく示している。間において結局会いに行つたのも、それは女を「取り逃がした」結果、その正体を探るという目的のために「仕方がなくする行為であり、「御母さん」を慰めるためでないのは勿論、「浩さん」を慰ぶ行為ですらない。「御母さん」と対面して途切れがちな話をするのも、「余は此時浩さんの事も、御母さんの事も考へて居なかつた。只あの不思議な女の素性と浩さんとの関係が知りたいので頭の中は一杯になつて居」たという。この文の頭に「白状して云ふと」とあり、ここでも前述した「余」の対・読者意識は強く働いている。続けてそこでは「全く冷静な好奇獣とも称すべき代物に化して居た」「此日に於ける余」を殊更に強調することで、「平生の」「余」が「同情的動物」であることを担保しようとしているかのようなうだ。尤も、それが「同情」である限り、先に「余」がそれに感じ入つて涙まで流した〈誠〉ほどの実を持つていないことは既に述べたとおりであり、又強度においても彼のここでの好奇心には遙かに遠く及ばないことも言うまでもない。この後、「余」は手掛りを求めて、先に「御母さん」から読んでもらいたいと言われていた「浩さん」の日記を借り受けて帰宅する。

ところで、「余」はなぜそれほどまでにその女のことにと拘るのだろうか。それは単純に、若く美しい女に対して寄せる彼の感情も勿論あるであろうが、他方、自分にとつての「浩さん」——彼にとつての自分という、自分の知る生前の彼との付き合ひをもとに、自らの中で期待されるところの人間関係から発している側面が多分にあるだろう。最初に彼女を見たとき、「余」は「浩さん」の墓の前で次のようなことを考えている。

余は高等学校時代から浩さんとは親しい付き合ひの一人であつた。うちへはよく泊りに行つて浩さんの親類は大抵知つて居る。(略)尤も交際をしたからと云つて、必らず余に告げるとは限つて居らん。が浩さんはそんな事を隠す様な性質ではないし、よし外の人に隠したからと云つて余に隠す事はない筈だ。かう云ふと可笑しいが余は河上家の内情は相統人たる浩さんに劣らん位精しく知つて居る。さうしてそれは皆浩さんが余に話したのである。だから女との交際だつて、もし實際あつたとすればとくに余に告げるに相違ない。

「浩さん」との関係において、自分は他の人間に比して特別な存在であるということ。そうした自意識に「余」が強い拘りをもつており、又逆にそれが、女の素性を知るといふ自己の欲望を正当化するという図式がここには窺われる。¹⁸⁾

その結果、テキスト第三節以降の記述は「余」(にとつて)の謎解き、そこから敷衍された「遺産の問題」に話の軸は移っていく。極言してしまえば、そこでの「余」による記述——論理展開は、「自分の好奇心」に対して「趣味の遺産」という

「余」のいうところの「学問」的な意味づけを半ば強引に付与する（記述からは、「余」自らが、「いくら遺伝学を振り廻しても」云々と、その「学問」が「ジャスチフィケーション」——エクスキューズであることをある程度認めている節も読み取れる）過程に過ぎない。その部分については先行論が多く触れているのでここでは省き、従来なぜか等閑に付されてきた、「余」が「浩さん」の日記をどのように読んでいるかという点に本論は着目したい。

日記に関しては、「余」は「御母さん」からその存在を知らされたときから興味を持っていた。その興味は当初、そこに「亡友」の「遠慮なく吐き出」された「時々刻々の心ゆき」を読みうることにあったが、女の素性探求へと興味が移ってから、その「親友の手帳」もそのための具の一つへと墮してしまっている。即ち、そこに向けられる「余」の眼——想像力は、それ以上の働きをなさそうとはしていないのである。

朝夕身に着けていたものと思しい手帳に書き付けられていた「浩さん」の日記は、「陣中の出来事のみ」を「鉛筆でなぐりがきに書いたもの」である。「大概の事は一句二句で弁じて居る」様から、「余」は彼が「倥傯の際に分陰を偷んで記しつけた」ということは想起するものの、その場に置かれた「浩さん」の具体的状況や心情については全く意識していない。例えば「大突撃。中隊全滅、不成功」の記載の後に、「残念の下に！が三本引いてある」ことを語る「余」はしかし、その内容については何も言おうとはしないのである。

日記にはまた、「二三日一睡もせないので勤務中坑内仮寝。」と

あり、その前の「風、坑道内にて食事。握り飯二個。泥まぶれ」や「矢来風邪の気味、発熱。診察を受けず、例の如く勤務」というのと併せ、作戦の前に「浩さん」らの部隊は相当過酷な状況に置かれていたことが分かる。現に続く記述には「余程衰弱して居る」とある。その前の句を読んでいた「余は覚えどきりとした。」とあるが、それは不眠の記述に対してではなくて、「郵便局で逢った女」のこと（夢に見た）が出てきたためであり、陣中の「浩さん」の労苦を思ったからでは決していない。

ここから指摘できるのは、「余」の戦争という事態・状況、その過酷な現場に置かれた人間に対する感受性の鈍さであろう。ここで見られた日記の記述から、「余」は本郷郵便局での「浩さん」と女の出逢いの場面をかなり描写的に想い描いているが、他方戦地の彼に対してはその想像力は殆ど働いてない。このことは、作戦の中で周囲の人間が次々と死んでいく中で、砲声の中に「順番の至るを待つ」ている「浩さん」の姿に対し、「余」は（たとえ「軍人が軍さで死ぬのは当然の事である。死ぬのは名譽である。」といった彼自らの言葉がそこにあるとは言え）「成程死を決して居たものと見える」と、表面的な感慨以上のものを表していないことから明らかである。続けて「浩さん」の死の直前（最後・最期）の記述を読んだ「余はぞつとして日記を閉じた」とあり、一見その「ぞつとし」た要因は死を前にした彼の覚悟、それに続いてきた彼の戦死という事態についてのもののように見えるが、更に「閉じたが、愈あの女の事が氣に懸つて堪らない。」と続いていること、又先に指

摘の通り、日記から読み取れる「浩さん」の「衰弱して居る」ことよりも「郵便局で逢つた女」の方に想像が働く「余」であつてみれば、ここでも気にかかったのは「浩さん」が「愈是から死にゝ行く」(で記述が「ぶつりと切れて居る」)ことよりも、「誰か来て墓参りをして呉れるだらう。さうして白い小さい菊でもあげてくれるだらう。」という記述と、自分の見た女の行為との暗合の方にあつたのだと考えられる。実際、この後の「余」の記述に出てくるのは、徹底して「あの女」を巡る事態であり、「浩さん」戦死のことについては以降殆ど触れられない。

結 作品の構造

結局、「余」は「浩さん」の慰霊者としても、又「御母さん」の慰問者としても役に立つてはいない。奇しくもテクストの最後に、「余」から相談を受けた「御母さん」は「近頃一人の息子を旅順で亡くして朝、夕淋しがつて暮らして居る女が居る。慰めてやらうと思つても男ではうまく行かんから」というのを口実として件の女Ⅱ小野田の令嬢を呼び寄せ、「浩さん」のことを伝えるのに成功しているが、そこで言われることは確かに事実であつた。「御母さん」と小野田の令嬢の關係に、このテクストにおける戦争遺族救済のモチーフを読む論者が多いが、「余」の最後の叙述に「天下に浩さんの事を思つて居るものは此御母さんと此御嬢さん許りであらう。」とあつて、そこに自らが含まれていないことにも注目しなければならぬ。⁽¹⁹⁾「余は此兩人の睦まじき様を目撃する度に、將軍を見た時よりも、軍

曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す」のだが、ここで「余」の流す涙にはどんな意味があるのか、あるいはそこで泣く「余」はどのような位置にあるのかという問題が最後に残されている。

確かに、「こんな小説めいた事を長々しくかいて居るひまがない。」(つまり、この一篇は小説ではない)「元来が寂光院事件の説明が此篇の骨子だから」という「余」の言に従えば、このテクストの最後の部分の記述は蛇足である。「新橋で軍隊の歓迎を見て、其感慨から浩さんの事を追想して、夫から寂光院の不可思議な現象に逢つて其現象が学問上から考へて相当の説明がつくと云ふ道行き」は、「(小野田工学博士の)妹は余の推量に違はず例の寂光院であつた。」というところで尽きているからだ。しかし、仮にその後の記述を削つたとしたら、冒頭の新橋駅での描写、特に「余」の泣く場面との整合がとれなくなる。時日に追われ、また「もういゝと安心したら、急にがつかりして書き続ける元気がなくなつた」と言いながらも、「余」が(たとえ描写を省いた展開の叙述だけであるにせよ)ここまですて書いた上で擱筆したのは、どこかに先述したようなそれを読む読者(換言すれば、一篇に対するある意味での「小説」意識)を持つていたからだと言えよう。

しかも、その部分によく見ると「目撃する度に」とあるから、「余」の「涙を流す」のは決して一回的なことではないらしい。新橋駅での経験が、「涙が落ちた」と過去形で書かれているのに対し、ここが現在形であることは表現上一つの対照となっている。その意味では、この部分まで来て、この文章は超

越的な位置に立った（つまり、単に「浩さん」の親友としてではない）「余」による追悼になっているという見方があるいは出来よう。自らをその数に加えないことで、その墓を前にした時以上に、残されたこの二人を眼前に見ることで、彼に対する想いを新たなものにするという方向性である。

但し、そこに一つ追記しておかなければならないのは、その追悼の意が必ずしも戦死した友人に対するものとは全面的には言い難い、語を換えて言えば、必ずしもそうした者への感情に限られないということだ。具体的に例えれば、病死した友人もここには代入可能である。確かに、凱旋帰還した將軍や軍曹と、「旗を持つて思ひ切りよく塹壕の中へ飛び込んで、今に至る迄上がつて来ない」浩さんとの対比に、あるいは戦争批判の意を読み取ろうと思えば読めなくもない。しかし、そうした叙述を積極的に担う主体としては、「余」は余りにも弱いだろう²⁰。

その大きな要因としては、彼の想像力が他の事項に比したときに戦争に対して余りに働かないことにあるのではないだろうか。このテキストは時代と戦争ということを背景に持ちつつ、且つ徹底して想像力が物語を動かす原動力としてありながら、しかし叙述主体である「余」の想像力はなぜか戦争に焦点化することを回避し続ける。そうした構造は漱石の次作、画家の「余」を語り手に据えた「草枕」（『新小説』明治三十九年九月）に引き続いてるように思われる（「十三」での、出征する久一と那美の会話、それを傍で聞いていて、別れの最後に那美の顔に表れた「憐れ」を捉えて画にしようという「余」の態度を参照されたい）。「余」の上位に位置する作者・漱石の戦争

への意識ということの問題にするとすれば²²、それを解く鍵はどうやらそのあたりにありそうなのだが、その考察は次の機会としたい。

（1） 同時期の漱石書翰から確認できる。

（2） 冒頭部分に関しては、比較文学的見地からそのモチーフとなつたと考えられる作品候補が複数挙げられている（具体的作品名については、神田祥子「趣味は遺伝するか——夏目漱石「趣味の遺伝」論」（『日本近代文学』平成十九年五月）の第五節冒頭を参照）。又、戦闘場面は新聞記事（宮園美佳「夏目漱石「趣味の遺伝」小論——「学者」の立場と、日露戦争の報道に注目して——」（『日本文芸研究』平成九年六月、後『深虚集』論考——「小説家夏目漱石」の確立」（和泉書院 二〇〇六・六）所収）、そこに採用されている固定カメラ的視点からニュース映画等に材をとった可能性（佐藤泉「趣味の遺伝」——旅順上空、三次元の眼について」（『国文学』平成六年一月臨時増刊）がそれぞれ指摘されている。

（3） 管見では、同小説研究史上最も夙く「余」を実作者漱石から独立したものであると扱う方向性を示したのが越智治雄「『深虚集』一面」（『国文学』昭和四十五年四・八月、後『漱石試論』（角川書店 一九七二・六）所収）であり、更にそれを発展させて「単なる語り手にとどまらず小説の内部で活躍する「余」に沿って考えてゆくこと」に徹して論を構築したのが小林幸夫「夏目漱石「趣味の遺伝」——構造に関するノート——」（『上智近代文学研究』昭和五十七年八月）である。

（4） 佐藤泉・注『前掲論』に、「機関砲は生命をひとつ奪うという以上の弾丸を打ち込む過剰殺傷兵器であ」という指摘がある。

（5） 「これら陸海軍の大規模な拡張に、日本は国家財政の半分かゝくを毎年つきこんだ。

日清戦争直後の一八九六年（明治二十九）の国家の歳出の総額は約一億六八八五万円、これは開戦前年の一八九三年の八四六〇万

円のおよそ二倍で、戦争中の一八九四年度（一億八五〇〇万円）や一八九五年度（一億七八六〇万円）に匹敵する。一八九七年度以後には二億二〇〇〇万円から三億円ちかくに歳出総額は膨張し、その四〇五割が軍事費にふりむけられている。（井口和起『日露戦争の時代』吉川弘文館 一九九八・六 二五頁）

(6) 渥見秀夫「趣味の遺伝」論——漱石の「戦争」小説——（『愛媛大学教育学部紀要 第II部 人文・社会科学』平成十年九月）。

(7) ここで「戦場を屠殺場と見なしていること」について大岡昇平は「戦争を国家権力のぶつかりあいと見る現実的な立場からすると、少しかつと言えるかも知れませんが」と述べている（講演「漱石と国家意識」『世界』昭和四十八年・二月）

(8) 山崎一「写すわれと写さるる彼——趣味の遺伝」のこと——（鶴見大学紀要 国語国文学篇 昭和六十一年三月、後「夏目漱石の言語空間」〔笠間書院 二〇〇三・一〕に収録）に、「余」は、さしづめ、迷亭の血筋をひく美学者か心理学者という格であろうか」という推定がある。

(9) 赤井恵子「漱石と戦争・序説」（『熊本学園大学 文学・言語学論集』平成九年六月）に、「將軍の身体が最も鮮明に「余」に戦争を看取させるものである」という指摘がある。

(10) とは言え、芥川「將軍」が全面的に反戦小説かというとは必ずしもそうではないと考えている。その旨については別稿を期したい。

(11) 小林・注3前掲論に、ここで「描写がもつ真迫性以上に重要なことは「余」が日常抱いていた「平生の偉大なる浩さん」という認識を戦場において再現しようと思志したことである」との指摘がある。

(12) 視覚・視点の問題を中心に本作を分析した佐藤泉前掲論（注2）に、次のようにある。

カメラは一兵士の近接撮影をせず、高所からの視覚で「群れ」を写す。（略）これは何が起こるかわからない現場でじかに戦闘をみる視線であり、（略）細部の様子までは把握できない

い遠景を眺める眼、だが実のところ後方の国民である語り手はこの前線に不在である。映像を見るものが遠い戦地に紛れ込んでしまふニュースフィルムのような幻想「旅順入場式」のように、幻想の前線を眼下に見ているのだ。

(13) 日露戦只中の明治三十七年十一月の『東京朝日新聞』、この時期紙面には連日戦死者の忠勇ぶりを伝える伝記的記事が掲載されているが、その二十九日付（五面）に、「峽北の勇士（故篠原中尉）」という「志願兵から出身した歩兵中尉」のものがあつた。「浩さん」と造形とやや重なるところがあるかと思われるのでその一部を引用する（尤も、所謂モデルということでは、他にもし事例はあるだろう）。

（略）攻囲軍の勇士たる我歩兵中尉篠原真惟（七十）氏は実に此仙境（引用注／甲斐国北巨摩郡多麻村字東向）に生れて古英雄の遺風に薫化されたる忠烈の士と云ふべし。敵父は篠原俣孝氏として群下屈指の名望家として夙に公益に尽し又其崎貯金銀行頭取として経済界の立者なるが旧記によれば祖先は武田家の家臣にして爾來世の変遷に拘らず依然たる家門の繁栄數百年間名主役を勤め來りし程なりと、中尉は明治三十一年の一年志願兵にして城北中学の出身なるが除隊の節は一等軍曹として帰休したり時に敵父は過まつて足部を傷つけ家政は勿論公務をも挙げて長男なる中尉に託したれば以來孜々として業を励み居る中三十四年歩兵少尉となり正八位に叙せられ、愈報国の念を堅うせり、斯くて少尉今回の役に出征し万死を期して征途に上りしが（略）夫より進んで遼東に上陸し攻囲軍に加はり部下を励まして昼夜を分たず激戦し八月十九日大望山砲台攻撃の大激戦に際して終に敵弾に斃れしが其勇敢なる動作は人に勝れ心神自若として指揮最も宜しきを得たりといへば中尉の一死は全軍の士気を鼓舞したる事必ず大なるべし宜なるかな功五級に叙せられ中尉に進む。（略）尚「弟二妹あり、（引用注／弟）南雄氏は同郡若神子村の豪家川手氏の養子となれり（中尉肖像既掲）又、「草枕」には、「もと志願兵をやつたものだから、それで召集

された」(八)という青年の事例が描かれている。これから類推して「浩さん」も日清後の戦間期に志願兵となった結果、今戦争に召集されたと考えるのが妥当ではないか。尚、同時代の志願兵制度に関しては、神田・注2前掲論にも指摘がある。

(14) 『日露戦争統計集』第八巻(東洋書林 原書房発売 一九九五・

六 ※陸軍省編『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計』の複製。

(15) 呉俊永『趣味の遺伝』論——「学問」に隠された「余」のエゴイズム——(『日本語と日本文学』平成十二年五月)は、「浩さん」と女の「出会いを過去の中に埋没させ、もう一つの出会いがこれから始まろうとする可能性を暗示」する「こうした〈生者の論理〉を展開するところに、「時刻」を持ち出してきた「余」の狙いがあったのでは」と指摘する。

(16) 呉・注15前掲論も、「余」にとつて「御母さん」訪問が他の目的のための手段でしかなかったことを指摘している。

(17) 夙くは、谷口基『趣味の遺伝』試論——もう一つの〈未了の恋〉——(『立教大学日本文学』平成二年七月)に「余」の内に秘めた恋情に関しての言及がある。

(18) 夙に、福井慎二「変奏する写生文の構造——漱石『趣味の遺伝』論——」(『河南論集』平成十四年三月)が次のように述べている。女友達の存在を浩一が親友たる余に故意に隠していたのではなく、個人の意思を越えた趣味の遺伝によって、一度見かけたきりの女と恋に落ちた不可抗力の出来事であったのだと理解すること、浩一から何でも秘密を明かされる特別な存在としての余のアイデンティティを守ろうとしたのだ。

(19) 谷口・注17前掲論はこの点に関して「敢えて自己の占めるべき場所をそこに求めぬことが」自らの恋情を直接に語らなかつた「余の〈騙り〉のヒロイズムに最後の光輝を与える」と述べている。

(20) 「余」と漱石というレヴェルの違いがあり、これはあくまで参照項だが、明治三十八年十二月二十九日附伊藤左千夫宛漱石書翰に、このテクストを「野菊の墓」と重ねて語る視線が示されている。

(21) 竹盛天雄「趣味の遺伝」……『諷語』の仕掛け」(『漱石 文学

の端緒」(筑摩書房 一九九一・六)所収)に、「語り手「余」は、もともとそれほど強力な語り手として設定されているわけではなかつた。」という指摘がある。

(22) 駒尺喜美「漱石における厭戦文学——『趣味の遺伝』——」(『日本文学』昭和四十七年六月)がこの小説に漱石の厭戦思想を読み取るという主張をして以降、同テクスト研究史上ではしばしばこの点が問題とされてきた。

*本文の引用は『漱石全集』第二巻(岩波書店 一九六六・二)に拠つた。総ての引用に於いて字体を通行のものに改め、ルビは省略した。傍線・傍点はすべて引用者が付した。